

# 学童保育所のダウン症児に見られる適応上の問題と援助

○常田秀子 古屋喜美代 西本絹子 田口久美子 長谷川明弘 浜谷直人 吉川はる菜  
(和光大学) (神奈川大学)(高崎健康福祉大学) (立正大学) (東京都立大学) (お茶の水女子大学)

【問題と目的】学童保育所に在籍し統合保育を受ける障害児は近年増加しているが、ダウン症児はその中でも比較的大きな割合を占める。一般にダウン症児は対人関係が良好で適応がよいと言われるが、学童保育の指導員からは「切り替えの悪さ」「悪いことば使い」「突発的な乱暴」などが適応上の問題として指摘されることが多い(2002、古屋)。本研究の目的は、ダウン症児が学童保育所で示す適応上の問題について分析し、援助方法の指針を得ることである。この際、学童保育のダウン症児にとっての生活文脈上の位置付け(家庭や学校とは異なる人的ネットワークで異年齢保育や指導員の存在がいること、独自の活動を行なうことなど)や生涯発達上の位置付け(生涯発達において重要な余暇生活の基盤の一つであること)にも、十分配慮したい。

【方法】X区の公設公営学童クラブにおいて、平成8～13年の間に筆者らが巡回相談を担当した中程度の知的障害を持つと推測されるダウン症児計12名に多く見られた適応上の問題要因を抽出する。分析に用いた資料は、各対象児に対して年に2～3回づつ実施した巡回相談において、事前に指導員から提出された報告書、巡回相談時の職員からの聞き取りと筆者らの行動観察に基づくアセスメントおよび事後カンファレンスを踏まえて筆者らが作成した巡回相談報告書などである。

【結果と考察】a.対人関係にかかわる問題：特定の指導員や子どもとの密接な関係を持つ児が多く、当該指導員の交代や相手の子の退所を経験した児の中には、その後しばしば顕著な不適応行動の増加が観察された(7名中5名、以下5/7と略記)。またつばを吐く・玩具等をばら撒く・他児や指導員のお尻を触ったりスカートをめくるなど、指導員の注意を強引に引きつけようとする行為がしばしば見られた(9/12)。仲間関係に関しては、自分の思い通りにならない場面で「バカ」などの強い紋切り型のことばで拒否したり(7/12)、高学年になって他児との関係ができて相手にも一方的にふるまうか自己主張を全くしなくなるなど両極端な

かわりをすることが多く(3/4)、対等な関係を作ることが難しいことが多く見られた。

b.対物関係にかかわる問題：学童保育所が提供可能な小学校低学年向けの遊具や活動を遊びこなせず、楽しめる活動を見出すのが難しい場合もあった。そのような場合遊具を用いて活動していても、指導員らを意識しながらわざとふざけたり、遊具をわざと乱暴に操作するなどして注目を集めようとし、活動自体を楽しむという意識は薄くなるようだった。自身が楽しめる活動を得られた場合には大変熱中し、他の健常児がかかわることで他児との関係を築ける場合がある一方で、それに固執するために他児から孤立することも見られた。

c.自己概念や自我形成にかかわる問題：からかわれること・何かを強要されること・失敗を糾弾されることなどに対して強い拒否を示し、突発的な乱暴で対応したり、相手の言うことを一切受け入れないことなどが見られた(4/12)。からかいを自己の全存在の否定ととらえてしまうような、自己の未分化・未成熟さが背景にあると考えられた。特に高学年に苛立ちや乱暴な行動が特徴的だった(3/5)が、自他からの年長者としての位置付けとのギャップなどのために、これらの場面でのストレスが一層大きく感じられるためと考えられた。

d.まとめと発達支援の方策：指導員からの注目や承認に関心が焦点化しやすいため、指導員との関係を支えに主体的活動の幅や仲間関係を広げることが比較的困難なこと、他者からの注目への過度の関心の累積から他者評価に影響されやすい自己概念が形成されること、これらが複合的に関連して高学年時の苛立ちやストレス反応を導いている可能性が示唆された。これに対しては、児の主体的な活動をうながし、自らを評価し自尊感情を高められるような支援を行なうことが必要であると考えられる。一連の経過には認知上の特性や言語表出の制約などのダウン症児の特性と、学童保育所が提供しうる人的・物的環境や活動の特性が影響しているのかもしれない。